

目 次

俳 句

草の丈……………七

「草の丈」時代拾遺……………七〇

歌仙陽ざかりの巻（兩吟）……………七七

流寓抄……………八一

「流寓抄」時代拾遺……………一七九

流寓抄以後……………一八五

小 唄 他

……………三三三

## 散 文

文字に対する敏感	……………	二三三
『道芝』跋	……………	二三六
選後に	……………	二四七
『草の丈』の序	……………	二五〇
解 説	……………	(恩田侑布子) 二五七
略年譜	……………	二八七
季語索引	……………	(恩田侑布子編) 二九三
初句索引	……………	三〇一

俳  
句

草  
の  
丈

浅草のころ（明治四十二年—大正十二年）

新<sup>しん</sup>參<sup>ざん</sup>の身にあかくと灯りけり

一

花曇世帯道具を買ひありく

二

ふりしきる雨はかなむや櫻餅

三

ゆく春や屋根のうしろのはねつるべ

島崎先生の「生ひ立ちの記」を讀みて

神田川祭まつりの中をながれけり

ふりしきる雨となりにけり螢籠

女いふ——吉原にて……

三味線をはなせば眠しほとゝぎす

夏足袋やいのち拾ひしたいこもち

もち古りし夫婦の箸や冷奴

浅草千束町のおもひでを語る

蓮咲くや桶屋の路地の行きどまり

秋近き底ぬけぶりとなりにけり

とりとめしいのちつゆけきおもひかな

灰ふかく立てし火箸の夜長かな

上州磯部にて

温泉ゆの町まちの磧かはらに盡つくる夜寒よふかかな

夜や學がく子しや鏡きやうくわ花はな小史せうしをよみおほえ

奉公ほうこうにゆく誰たれ彼かや海うみ嬴い廻まわし

海嬴うみいの子この廓くわくわともりてわかれけり

ぬれそめてあかるき屋根や夕時ゆふとき雨あめ



## 鎌倉香風園

短日 やすでに灯りし園の中

元

## 鮫洲川崎屋にて

まのあたりみちくる汐の寒さかな

三

## 旅中

桑畑へ不二の尾きゆる寒さかな

三

## 病中、人の計に接す

粥啜るよみぢの寒さおもひつゝ

三

## 向島

水鳥や夕日きえゆく風の中

三

浅草の塔がみえねば枯野かな

二四

年の暮形見に帯をもらひけり

二五

闇の梅ばけものがるたはやりけり

二六

風の絲まきつゝはゝをおもふめる

二七

竹馬やいろはにはほへとちりぐに

二八

秋風や水に落ちたる空のいろ

大正十二年九月、淺草にて震災にあひたるあと、本郷駒込の縷紅亭に立退き、半月あまりをすごす。諸事、夢のごとく去る。

日暮里のころ(大正十二年十一月—昭和九年)

I

大正十二年十一月、日暮里渡邊町に住む。親子三人、水  
入らずにて、はじめてもちたる世帯なり。

味すぐるなまり豆腐や秋の風

三

二階八疊と六疊、階下八疊と六疊と四疊半、外に臺所に  
所屬せる三疊、これがいまある渡邊町の家の間取である。  
このなかでわたくしの最も好きなのは階下の四疊半であ  
る。奥まつた感じをもつてゐるからである。すなはちこ  
の部屋をえらんで茶の間に宛つ。

ひぐらしに燈火ともしびはやき一ト間かな

三

硝子戸に風ふきつくる蜻蛉とんぼかな

墓原のまばゆく晴れし蜻蛉かな

吉原のある日つゆけき蜻蛉かな

長男耕一、明けて四つなり

さびしさは木をつむあそびつもる雪

春の夜のぬかぼしこぞるくもりかな

三

三

三

三

三